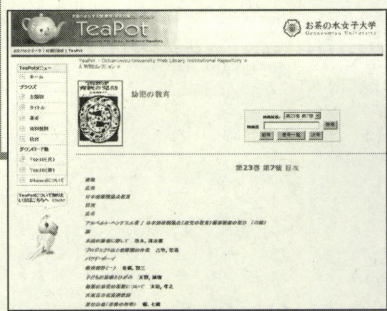


▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (17)

『幼児の教育』ネット散策の雑感

阿部真美子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称 TeaPot）」にてバックナンバーインターネット公開中。
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

▼はじめに

文明の利器は使いこなすのが厄介だと、ブツブツと文句が口をついて出る日ごろの私である。しかし、情報入手のためのインターネット化が進行する時代にあつて、うまく使いこなせないなどと口にするのは、恥ずかしいという思いがある。そのような熟年世代の同類はいらっしゃらないのだろうか。インターネットの扱いに心もとない私が、この数か月間のインターネットにおける検索、というより散策で得た新鮮な出合いの幾つかを記すことにしたい。

▼検索プラス散策は楽しい

まず私が試みたのは、自分の研究とかわるさまざまなキーワードを打ち込んでみることにした。しかし、なかなかヒットしてくれない。この原稿を書くということからすると、特段の成果もなくひと

月、ふた月と時間が過ぎてしまった。このシリーズ『幼児の教育』ネット公開に寄せて）を読むと、執筆者の方々はうまく資料検索の実をあげておられるので、今後の研究にとって参考大であるが、身の縮む思いであった。

思い返してみると、成果の上がない理由はキーワードがうまくヒットしなかっただけではない。隘路脱却のため、自分の研究につながるキーワードから離れてみようと思ひ、第一巻（『婦人と子ども』）から読み進めることにした。興味に任せてピックアップし印刷し、次々と読む。資料はおもしろく、つい引き込まれ、おもしろがっているうちに、時間は過ぎていった。古い文体であっても、『幼児の教育』は読みやすく親しみやすく書かれていることも引き込まれた理由であろう。

たくさん知らないことにも出会えた。このことも新鮮な経験であった。研究目的という縛りから自

分を自由にして、『幼児の教育』の散策は楽しかった。検索プラス探索は今後もぜひ続けてみたい。そのような豊かな時間がもてたのも、身近で手軽に見ることができるところで、膨大な資料をインターネット化していただいたお陰である。ご苦労された方々に感謝したい。文明の利器は使いようである。

▼臨場感あふれる言葉に触れて

臨場感にあふれる言葉による記事が多いというのも、『幼児の教育』散策での感動であった。倉橋惣三は代表選手だと思う。「保育そのときどき」というタイトルの記事（第三十二巻第十号P.71）を見てみよう。倉橋は東京女子師範学校附属幼稚園の保母室のグリーンボードに次のような言葉を書いた。

秋晴る、日よ

子どもらの聲高し

外へ、外へ、外へ

秋の高く青い空の下で子どもたちの遊びに興じる躍動感がイメージされる。保育者たちには瞬時に倉橋の求める保育が伝わったに違いない。そのエピソードに続いて、幼稚園の子どもが身近な外である園庭に出ない（あるいは保育者が積極的に出そうとしない）こと、そして「柿、栗、等々、お話の中だけでよく知ってゐて、ほんもの、木を見たことのない子ども」という都会の子どもの状況を内心憂慮しつつ、保育者を批判したり叱責したりするのではなく、「見せてやりたいですね。」と呼びかける。さらに、「どこでも彼しこでも、みんな幼稚園だけに言つて見たい。あなたの町も村も、野も丘も海邊も、一とくるみに、われ等の幼稚園と見なませう。」という言葉が続いて、倉橋の中の大きな「園外保育」構想論が展開されるが、あくまで言葉は読者への呼びかけである。

もし私が当時の保育者であつたとすれば、と想像

してみよう。保育界の巨人ではなく、身近にあつて保育者の仕事の大変さをよく理解し、優しく教諭してくれる保育の親の言葉として、体全体に浸透していくかもしれない。『幼児の教育』における倉橋惣三にかかわる記事は、倉橋研究、日本の保育史研究にとつて大変価値のある資料であることはいふまでもない。だが、それだけに限定されないであろう。現代の保育実践や保育者養成を考える上でも示唆に富むものというのが、わが実感である。論理から入るだけでは、気づきには到達しにくいことがある。「解題」（津守真）では『幼児の教育』誌上における倉橋の保育論について、「具体的な保育の根底にある子どもの見方が、詩的な表現をもつて、一貫してあらわれている。」と述べている（『復刻幼児の教育 別巻』一九七九年三月p. 9）。疲れた時など倉橋の詩的表現に癒やされるひと時もあつてよい気がしている。

▼外国の保育と倉橋惣三

ここあたりで『幼児の教育』と私の研究との接点をもつことにしたい。日本の保育指導者はどのようにアメリカ合衆国の思想や実践を接取したのだろうか。倉橋は「誘導保育論」を作り上げる上で、積極的にアメリカ合衆国の新教育を吸収したことはよく知られている。『幼児の教育』を見る限りでは、彼は新教育の中心であったシカゴのシカゴ大学とニューヨークのコロンビア大学を拠点にして、実践見学、雑誌類、書物、インタビュールによって当時の情報を入手していた。「シカゴ大学の幼稚園へも一週間程入り浸って、先生方とも、目の碧い、髪の紅い、人形の様な子供達とも懇意になりました。」〔シカゴより〕『幼児の教育』第二十卷第五号 p. 169) というように、子どもたちのかかわりも楽しんだようである。この時、幼稚園と小学校との連

続プログラムと取り組むテンブル女史の論文を入手し、『幼児の教育』編集部へも訳して掲載するよう依頼している(同上 p. 170)。上記の二つのカレッジはわが国でも著名であるが、次のカレッジはほとんど知られていない。

シカゴに居た時でした。有名なミス・ハリスが校長をして居られるナショナル・キンダーガーテン・エンド・エレメンタリー・カレッジを訪ねました。その日の私の目的は保姆科の方の参観でした。そして、どこを参観しても何時も感じる様に、自分達が國でして居ることに、まだ足りないところの、いくらもあるのを思ったりしました。此の學校には生徒の實習の爲め幼稚科も勿論ありました。私はそれも見せて貰ひました(「森の幼稚園」『幼児の教育』第二十一卷第二号 p. 49)。

このカレッジは、小さな学習会から始まって、その当時には母親教育のコース、慈善幼稚園のコース、小学校コースなどをもつ教育専門のカレッジとして成長し、拡張講座（エクステンション）も展開する先進的なカレッジでもあった。そのアーカイブに何度も資料調査に通った私としては、この記事にはとても親近感をもったものである（このカレッジは、現在ナショナル・ルイス大学となっている）。

さて、このカレッジの教員から紹介されて、倉橋は「此の國で一番すきな幼稚園」（同前p.50）と出会う。シカゴから列車で一時間の郊外にある小さな田舎町、ドナー・グロープの幼稚園（彼は「森の幼稚園」と呼ぶ）である。その幼稚園のさまざまな環境について述べる一方で、「人間味のある幼稚園」（同p.52）とも評価し、「幼稚園は人ですね。

つまり先生の人柄ですね。」（同p.60）と結ぶ。白人中心主義で、黄色人種である日本人への差別が強

かったであろうアメリカ社会での、彼の負の経験を想像できるように思う。

アメリカ合衆国での倉橋の情報収集は以上に尽きるものではない。今後も彼の歩いた道をたどるといふ検索の楽しみが増えた。

▼学生の教材として活用する

最後に、教師である私にとつての『幼児の教育』について述べてみたい。最近の学生にレポートを出すときと当たり前のように、インターネット検索した材料で書いてくるといふのは、大学教員間の会話でよく聞かれる話である。中にはウィキペディア（Wikipedia）を資料に使ったりしているという嘆きの声もある。このようにインターネットは若い世代にとつて情報収集のツールになっているので、それならば『幼児の教育』のネット検索を有効に活用できないかと思う。

たとえば、「保育実践と子どもの遊び」をテーマにするとしよう。学生に『幼児の教育』を検索し授業の材料を提供してもらおう。検索のプロセス、そのテーマにヒットした主立った資料の一覧、なぜその材料を選んだか、記事を読んで考えたことなどを発表してもらい、さらに選んだ材料について意見を述べてもらって、全体で討議をする。図書館に行きたがらない、本を読まないと嘆いても仕方ないので、このように「調べる」「まとめる」「プレゼンテーションする」「ほかの人の意見を聞く」「意見交換する」ことをつなげてみたい。この先にさらに図書館に足を運ぶようになることを期待するのは甘いかもしれないが、若い世代に本物の情報との出会いをつくり、多くの気づきをもってもらうことへのイニシエーション（入門・手ほどき）にはなるのではないか。きつと若い世代は私が想定しないような新鮮な成果を示してくれるように思う。

『幼児の教育』は実践について考える格好の材料が詰まっている。インターネット化する以前から三数十年間、保育者養成にかかわる授業の教材に使ってきたのだが、その場合は私自身が選び学生に与えてきた。イニシエーションとしては、これではいまの学生にはマッチしていないという反省があった。では同じ教材を、若い感性を揺さぶり、考えを引き出す材料にできれば、という考えに達した。このことに共感してくださる方がいれば、情報交換なり共同研究していききたいものであるが、いかがであろうか。

本シリーズの二回目で瀧川光治氏が、「幼児教育学・保育学の先達の論考や実践がインターネット上で検索でき、PDFファイルで見られるということ」は、保育者養成教育の教材としての積極的活用という道も広がるのではないか（第一〇八巻第二号）と述べておられる意見に同感であることを付記する。

（青山学院女子短期大学子ども学科教授）